Giovanni Multura

ムルトウーラについて

ジオヴンニ・ムルトウーラについては其人となりを紹介し得ぬ事を遺憾とする。

此稿は「イル・プレットロ」誌第十七年第四號に掲載されたもので、伊太利人としては可成進んだ考をプレットロ樂器についてもつて居る事が判る。

グランデ・オルケストラに於ける
プレツトロ族樂器

近代音樂はあの純交響樂に於て更に又準樂劇の音樂に於て、一種の特殊ある道程をとつて今日の水平線に達して居る。

現代の音樂に於ては、人類の偉大なる精神と云ふものは、唯々慣習とか、傳統とか、又は煩雜なる法規に限定された困難なる道を辿つて、漸く極めて拙劣に表現され得た許りである。

我々の精神的物力論を苦しめる熱情は、新しい道程をとつて進み又視覺認識を超絶する迄に遠く進む、少くとも進まんと努力する熱情である。

藝術家が個性を確立せんがため、崇高なる創造の苦しみの下に奮鬪して居るこの道程によつても、僅かに簡單なる試みだけでこの方面は直ぐ蕩盡されてしまつた。

この精神的完成に達せんが爲めに新しきものを遂ふ熱情、既にハイドンやヴエトウフエンの傳統的なメソディスティクな管絃樂に、又續いてベルリオズのそれにも（この後者はその組織の廣大なる點で）革命を起すに至つたこの熱情によつて、遂に現在の只管音樂家の個性を確立尊重し、その交響樂創造者の本能に特性を與ふる傾向を有する近代管絃樂の組織を見るに至つたのである。

從つて爰に樂想の變動性と歩を同じうする樂器の極端なる變動性が生ずる。樂器編成法を闇夜の光明として旋律の工夫や、多音的多色畫法（ポリクロームス）、新しい音色や、新しい樂器の研究や、現在使用中の樂器に新しい音を發見するに至らしめた新しい音域の研究（遂にはオルケストラに人聲としてではなく、音色の一種として合唱團を使用する迄になつた）と云ふ樣な方面に向つて居る近代オルケストラが、之に對して注目に價する貴重なる貢獻をなし得るプレツトロ及びピツツイコ族樂器を樂器編成の內に加へないのは、實に不思議な理解の出來ない事である。

モツアルトを始めロッシイニ、ヴエルデイ、ピエトリ等によつてプレットロ族の樂器がオルケストラに使用されたのは事實である。然し此等に於てはプレットロ族樂器は實際グランデ・オルケストラに必須の要素として使用されたものではなく、特殊の自由な要素としてである。

之等の作曲家がプレットロ族樂器を取扱つた方法を見ると、宛然古代の畫家が壁畫や神祕的な畫題をもつ繪に於て背景となるべき風景を取扱つた方法を思はせるものがある。重要なる主題に對しては可笑しい程詳細を極め、大きな一つの畫にいくつかの小さな繪を嵌め込んで、血の氣のない生命を保たせて居る點で。

マンドリンをオルケストラに用ひる試みは近代の交響樂にも見られる。併し、それが最も巧みに取扱はれた時でも（マアラーの「この世の歌」）マンドリンの杜切れ杜切れの微かな二絃音を……全樂器の使用されて居る最中にそこ〳〵でトレモロさせ、又ハアプのアルペッジョの第一音をペンナアタでもつてアクセントを付けさせ

たり、絃樂器の進行に恐る恐る遁走的に和せしめたり、全く無意味な殆んど耳にも入らないと思はれる許りのつまらない音を用ひるのみである。

斯く迄プレットロ族の樂器が價値を低く見られる理由は、云ふも口惜しき限りであるが、大多數の樂器編成者が、プレットロ及びその代表的樂器の、獨奏合奏を問はず凡ての演奏について、或はその音色の種々な差違（ナポレタナ、ロムバルデイヤ等）について、又音域の差異（マンドリノ、マンドラ、マンドロンチエロ等）について全く無智識なるによるものである。

何故ならば、吾々はいくつかの極めて近代の總譜表を吟味する時、吾々はそこにその形式と云ひ、その內的意義と云ひ、純然たるマンドリン音樂であるべきものを所々に見出すからである。そして此等の音樂は高價なる多色畫法（ポリクローム）と晦澁なる和絃と贅澤な樂器の濫用によつて、宏大なる交響樂的精神の假面を被つて居るのである。

蒼白と云つた感じを持つ音色、或はスタッカート、ピチカートの音色は、他の樂

器よりも寧ろブレットロによつて、立派な效果をもつて光輝を發し得るものではなからうか。ブレットロ特有のあのトレモロは適當な立派な音樂家に取扱はれるとき、オルケストラにいみじき價値をもつ事は出來ないのだらうか。他のオルケストラの要素に不思議な、奇怪な、それで居て微妙な效果を交へる時、何故に偉大なる合奏が成立し得ないのだらうか。

以上述べた如く、近代のオルケストラが種々な重奏によつて、その音樂に表現の眞摯さと力强さを與へんとし、從つて樂器編成の畫板(パレット)によつて、或は細微なる、或は强大なる、あらゆる音階に價値を認めんとして居る事が事實であるならば、その效果を、而も驚くべき效果を、獨奏に重奏にブレットロ族の樂器を用ゐることによつて代用したら如何だらうか。

近代の樂器編成には今や溢れんとする一つの鹹湖が明かに存在して居る。そしてこの鹹湖は、ハアプを以つて充分に立派に代用し得ると考へ信ぜられて居るビッツ

イコ樂器殊にブレットロ樂器の無いがために生じたものである。

併し、この鹹湖を滿たす爲めには樂器編成者がブレットロ族樂器の眞の藝術的なる演奏に對する、充分なる理解のみならず充分なる確信を持つ事が必要である。

そしてこの事は雜誌による、特に實際的な大宣傳（政略的な……或は商略的な言葉であるが許して戴きたい）によつて得らるゝものである。

なぜなら、小數の勇敢な斷乎たる辯護者の努力にも拘らず、現在ブレットロ族の樂器は最少の藝術的價値をも認められて居ないからである。それは微かな顫音をもつて、日々の勞苦に疲れた人々の憩ひを慰める月光の下のセレナータのたはむれ位に考へられて居るのである。

從つて吾々は爰に、實質に於てその名に恥ぢない丈の立派な演奏會を公衆に與へ、又ブレットロ音樂のために、マンドリン樂器の編成に特別の智識ある作曲家（私はかく云ひたい）を與へ、ブレットロ樂器の眞の藝術的特質に何物をもつても代へ

る事の出來ない樂器編成上の價値を課せんがため、オルケストラ・ア・ブレットロによつて微妙な、又更に微妙な助力を與へ得るいくつかの音樂、殊に交響樂を考へて見たい。

そして一般輿論の興味を起すため、實際の演奏を例證として、或は高く或は低く自己を主張する事、この事は最も必要とする所である。

然し、今回伊太利マンドリン聯盟によつて計畫された「ブレットロ四部合奏」競演會は必ず充分の賞讃を得、發起者達はブレットロ及びその典型藝術の開拓者たる演奏者諸君と共に一般の認むる所となる事を私は信ずる。